

阪神大震災の一こま ——神戸商船大学附属図書館復旧支援から——

情報管理課受入掛

後 藤 慶 太

「これは一体どこから手を付けたらいいんだろう」
最初に閲覧室に通された時は、正直いってひざから崩れ落ちそうになった。今日は長い一日になりそうだと思った。

1月17日午前5時46分、阪神地区を襲った兵庫県南部地震は各方面に甚大なる被害を与え、図書館界においても大小さまざまな被害が報告されている。ここではその中で私が復旧作業の支援に派遣された神戸商船大学附属図書館の状況について述べたいと思う。

地震が起きた日から10日目の1月26日、この日ようやく青木駅まで回復した阪神電車の車窓から見える風景はこれまで神戸へ行くときに見慣れたそれとはやはり違い、いやがうえにも現実起こったことを痛感しないわけにはいかなかった。やがて電車は青木駅のひとつ手前の深江駅に着いた。商船大はここから歩いて5分ほどの所にある。深江といえば阪神高速が倒壊した衝撃的な映像を記憶されている方も多いことと思うが、その現場は商船大から少し大阪方面へ戻った所であった。阪神高速の橋脚はほかにも何本か座屈しており、高速の下を走る国道43号線にかかる歩道橋とはすれすれの状態であった。そこを渡る時はさすがに肝の冷える思いだった。

商船大では武道場と学生寮が避難所になっていた。また遺体安置所にもなっていたという。附属図書館は館長以下10人の職員の方は全員無事で、交通機関の関係で出勤できない方を除いて図書館の整備につとめておられた。そこでこの日から他大学の応援を得て、本格的な復旧作業の開始となったわけである。当日は京大から3人、京都教育大と滋賀医大から各1人ずつの計5人が作業に加わった。冒頭に述べた閲覧室の状況は、スチール製の書架がすべて倒れ（書架どうしはしっかりと繋いであるのだが、そんなのは全くお構いなしに）、本は散乱していた。続いて案内された書庫でも書架が倒れ、本が散乱しているさまは閲覧室と同じ。ただスペースが狭い分、まさに足の踏み場がなく、こちらの方がさらに重症に思われた。集密書架は一見何事もなかったかのようであるが、見事にそろって傾いているので、もし開けた時どんなことになるのか、こわくて途中で想像するのをやめてしまった。

さて、商船大としては新学期に間に合うよう開館したいということだったので、この日は閲覧室の方から片付けることになった。まずは雑誌のコーナーから始めたのだが、こちらはすんなりと片付いた。しかし図書の方はそうはいかない。普段書架に整然とならんでいる時は、本というのはそれほどたくさんあるとは思わなかったけれど、こうして見るとずいぶんたくさんあるんだなあ、などと本の山を見ながら変な感心をしてしまった。ともかく足元の本を拾ってみる。そうしてぼつぼつと本を集め、部屋の隅に積み上げて行き、倒れた書架を起こしていくという作業の繰り返し。はたしていつ終わるのかしらとおもいつつも夕方までにはあらかた片付き、ようやく閲覧室全体が見渡せるような状態になった。

帰り際あらためて街の風景を見回した。すべてが、だれかの描いた抽象画の中の風景のようだ。だがこれはだれかの心の中を描き表したのではなく、現実の姿なのである。前日に強い余震があった。この日の作業中にも一度余震があった。空を飛び回るヘリコプター、サイレンを鳴らしながら行く救急車。不安な気持ちになってくる。一体ここはどここの国なんだろう。安穏とした日々を送っている私ではあまりに空々しくて、軽すぎて、「がんばって」なんて言えはしなかった。

（商船大図書館に対する支援は、1月26日から30日までと2月16日から24日までの2度にわたって行われた。私も2月20日に再訪したが、その時は閲覧室には書架が備わり、本もおおざっぱではあるが配架されていた。書庫も本や書架がいったん取り除かれ、次の作業に移れる状態になっていた。ボランティアとおぼしき学生も何人が参加しており、順調に復旧しているように見えた。被害について正確なことは把握していないが、振れてしまって使い物にならない書架が数個あったほか、破損してしまった本も作業中しばしば見かけた。それにしても図書館は地震にたいしては全く無防備である。これは京大図書館とて同じであり、もし利用者のいるときに大地震に見舞われたらどうするか、といったことも視野に入れて図書館作りを進めていかねばならないと思う。）